

## 「地図づくり」プログラムについての研究

塚本瑠一（大阪薫英女子短期大学）

トレーニング 五感 環境・安全学習 表現

### 緒言

著者はこの「地図づくり」プログラムを1988年頃から青少年野外活動リーダーの研修会で始めた。その発想は登山での読図であるが、地図を読むためには地図を作る発想が必要であると考えた。

野外の自然活動のプログラムとしての目的はまず、自分たちが生活する場所の認識、二番目には安全の確認、全体的な意味では創造性の開発であり、柔軟な発想の開発であると考えた。

この地図づくりプログラムをやっている内に子どもたちからも大人からもいろいろな思考のすばらしさを教えられた。

地図づくりプログラムの方法論と効果についてこれまでの体験と調査・研究を報告する。

### 1. 研究方法

1988年からの各世代を対象にしたプログラム実施の方法と効果をまとめ、さらに、その内容を分析した。その方法についてはプログラムから効果までを「地図づくりリレシヨナル構造」をデザインし、作業目的と効果についての効率化と内容の充実を研究した。

特に指導者の学習には自然の見方についての訓練の必要性を考え、ルートマップ作成、自然感知票によるトレーニング方法を実施した。

JOSEPH CORNELLの『ネイチャーゲーム』との関連性も重要であると考え比較検討した。

### 2. 結果と内容

#### 1) 地図作成の目的意識

J.CORNELLのネイチャーゲームの「自然と自分が一体であるあることの認識」「五感を使つての認識」「感動の分かち合い」などと、いわゆる「環境学習」の手段、「安全確認」の方法としたものである。

自然観察でもマニュアルに従って、改まってやるのではなく人間の好奇心をエネルギーとして、主体性をもってやるのがいい。地図作りのプログラムは自分の置かれている環境を自分の五感をつかって確かめ体験的にものごとを知る第一歩である。学習内容としても自然がいかに構築されているかを知り、また、生態学的な学習を体験的に学習できる。もう一つの目的として危険の発見とか安全を自分で作るという基本的なマナーを学習できる。

#### 2) 指導者のトレーニング方法

指導者自身の自然の中での五感を使つてのウォーキングによる方法としてはネイチャーゲームの「カラス=Focus Attention」の部類のゲームは役立つ。演者の作成した「自然感知カード」をウォーキングの中で適当に使つた方法もある。

第二の方法としては指導者が「地図づくり」プログラムを実施学習することで、特に発表までのすべて

の段階を学習する。

表 1. 地図づくりプログラムの目的

---

目的：1)好奇心、探索、調査  
危険箇所、発見、認識  
歩く、見つける、触れる、匂う、とらえる、  
歩く、考える、話す、アイデア  
記録、スケッチ  
2)発想、出番=分業、  
試行錯誤、完成、喜び  
3)出番、表現法、楽しく、

---

### 3) 地図づくりプログラムの展開方法

表 2. に示したようにおおそ3-4段階に分けた作業となる。この作業の中で子どもたちの「出番」を大切にし、また、各自の新しい可能性の発見を期待することになる。

表 2. 地図づくりプログラムの展開方法

---

方法：1)机上での論議→現場での論議→調査行動・活動→記録  
2)調査資料を前に論議→下書き→分業→完成  
3)発表方法の論議→発表

---

注：準備：鉛筆、水性ペン、鋏、糊、模造紙（各班2枚）、セロテープ、色がみ

### 4) 作成された地図について

作成された地図は、(1)地理的な視点から、(2)サイエンスの視点から、(3)心の視点から、(4)それらの複合など、(5)サバイバルの視点などがあつた。中には「心のポイント」と「知のポイント」に分けて表現しているものもあつた

表 3. 地図に読めるもの

---

心で：詩人、三行詩、俳句、音楽  
サイエンス：自然、科学的方法論  
人間の係わり：環境問題  
サバイバル：危険の発見、安全の創造  
感性：自然の中での自分  
自分なりに納得のできる生き方への思いをたどる

---

### 3. 結語

- 1) ミーティングと協同作業の中から各個人の和でなく積の形で現われる。
- 2) 「先が見えない」自然の中で模索と探究心があつた。
- 3) サイエンス、詩、音楽などの融合があつた。
- 4) 分業の成立があつた。
- 5) 自然を「分かち合う」ことの理解があつた。
- 6) 危険の発見と安全の創造があつた。
- 7) トレーニングの方法については明確な結果を得なかつた。
- 8) 地図作成のプログラムはあらゆる年代に効果がある。